

加藤辨三郎 述

歎異抄

10

文責 本誌編集部



悪人の自覚

『歎異抄』の第三章に移ります。

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ、弥陀の

本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願ををこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。

この章を拝読しますと、すぐに気がつきますように、善人と悪人というものが、ここには問題となっています。

私どもは、常識の上でも、善人・悪人は、だいたいわかっているつもりですが、さてそれならば、どういう人が善人で、どういう人が悪人なのであろうかとなると、なかなか難しい問題です。ことに、自分自身が、善人なのか、悪人なのかと考えてみますと、これはたいへんなことです。簡単に自分は善人だといえる人は幸せであらうと思います。だがそうばかりいかないうではありません。すくなくとも私は、とうてい善人だなどと思いません。したがって、善人だと口に出せた義理ではありません。こう考えると、善人・悪人というのは、たいへんな問題であります。

『歎異抄』を通じてよくわかりますが、親鸞聖人は、このような場合、自分は善人に入るのか、あるいは悪人に入るのかと、厳しく自分に問うています。そして、自分が悪人の仲間であることを深く自覚されていられるのです。善悪の問題でも、結局は自覚が大事だと思います。

『歎異抄』のしまいの方に「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり」とあります。親鸞聖人は、如来が知りたいうまうほどに、善を知ることができれば、私も善を知るといえるではありません。また、如来が悪だといわれるほどに、自分が悪を判別することができるなら、悪だといえるでしょ

う、だが、私にはとても如来のように見通す力がない、したがって一般論で善悪となると、何が善で何が悪かわかりません、といわれるのです。これは、わからないのではなく、結局、自分こそが悪人であるという自覚のもとにおおせになっていられるのです。この悪人の自覚をもつことにおいて、弥陀の四十八願が、いかに深い御慈悲であるかが、はじめてわかるのです。

悪人正機の教え

親鸞聖人は、『教行信証』の信巻では、自分で自分を「かなしきかな愚禿鷲」といって泣いていられます。これだけ勉強させてもらい、これほど教えを蒙っているながら、自分の現実には「愛欲の広海に沈没し」、つまり愛と憎しみの世界、限らない広さまた深さをもっている愛欲のなかに沈んでしまっているのだ、そういう自覚のもとにもうされているのです。愛欲の広海などときれいな言葉ですが、われわれの最も汚い面です。

私たちは、親鸞聖人のお書きになっているものを読んで、親鸞聖人が、愛欲の広海に沈没しているなど、さらさら思いません。それどころか、生死の世界から解脱しているよ

うに見えます。にもかかわらず、ご自身が「愛欲の広海に沈没し」といい、どうにもならない自分の愛欲の深さを自覚して、そこから出たいと思っていられるのです。だが解脱ができない。ゆえに「かなしきかな」と、もともと深い悲しみのなかから述懐なさっているのです。

つづいて「名利の大山に迷惑し」とあります。名利というのは、私どもが今日追求してやまない名譽と利益です。親鸞聖人は、頭をそって、墨染めの衣を着、とにかく九十歳までの一生を坊さんの姿で暮らされた方です。それゆえ、名譽だとか、利益だとかを、どこにも求めていられないように見えます。しかしご自身は、名譽と利欲の大きくて限りなく尽きない山に、すっかり迷い込んでしまったといわれているのです。そして、釈尊以来、高僧の方がたが法を説き、人生の深い教えを説いてくださったているにもかかわらず「真証の証」、つまり真実の道、本当の悟りに近づこうともしないし、近づくことを喜ばない、楽しまない私の現状は、痛ましく、悲しいことですと失望されています。しかもこの章の前に、真の佛弟子ということを説いています。真の佛弟子は、本願を信じ、念佛を申す人だと喜んで書いていられるのです。ですから悲喜こもこもといった

実感が、まざまざと出ています。このように親鸞聖人は、自分が愚か者であって、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑しているという自覚、これが親鸞聖人にとっての悪人の意識です。

昔からこの第三章は、悪人正機の教えだといわれています。如來から見て、悪人こそが正しい目当てといわれているのです。そこで私たちの機、つまり機とは、法を聞けばわかる、あるいは感ずることのできる、そういう生きもの、すなわち人間のことです。人間は法を聞けばわかるようにできているのです。ここに人間としての体を受けた喜びがあるわけです。

ところで悪人正機の正機でない機とはどういう機か。それは普通の機、つまり普機であって、一般の人びとです。たとえば「老少善悪のひとをえらばれず」ということは、老いも若きも、男性も女性も、善人も悪人もない。いわゆる一切衆生であって、そこには善人も悪人も区別がなく、善人を救って悪人を残すとか、悪人を救って善人を残すとか、男を救って女を残すとか、あるいは年寄りを救って子供を残すとかではありません。文字どおり老いも若きも、また善人も悪人も、そのようなことを一切問わないのです。

そしてすべての人びとを、一如平等に佛の世界に生まれさせてやろうという如来の御心です。それに該当するものが普機です。ですから、私たちだれでも、みんなこの普機であるわけです。

ところが、弥陀の本願は、たしかに普機を目当てにしています。だから一切衆生とおおせになっています。しかしその一切衆生のなかでも、悪人こそ如来は真つ先に助けたい、あるいは何んとしてでも残してはおかないという御慈悲です。悪人を残すようでは普機にはなりません。いわゆる本願にならないのです。おまえは大悪人だからやめた、助けられないと残したのでは、極めて限られた慈悲心にしかなりません。それでは一切衆生を救うという如来の大慈悲心が全うされないわけです。

だから、一方においては必ず一切衆生が目当てであります。その意味では、一切衆生はみな正機だといえるのであります。ところが、だが特に如来は、その中でも善人はほっておいても、あるいは自分で悟りを開いて佛となってくれるかも知れないが、悪人だけはめどがない、これは何んとしてでも、自分が出て救いあげなくてはならない、まず悪人から先に助けたいというお気持ちに相違ないという受けかた

です。

そして、老少善悪をえらばれずという広いご本願ですが、なかならず「罪悪深重、煩惱熾盛」、つまり非常に罪悪の深いものこそ助けずにはおかないというわけです。そのことが、この第三章ではっきり出ています。「善人をもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」というお言葉の、その目当てにされているのがこの罪悪深重の人なのであります。

下の下

親鸞聖人が、善人、悪人ということを問題にしたのは、どの經典で学ばれたのであろうか。それは『観無量寿經』であらうと私は思うのです。

『観無量寿經』には、法を聞いてわかる人間が、九通りに分かれて説かれています。これはきわめて常識的に、まず真つ先に救われて、浄土に生まれさせていただくのは、上の上の人びと、つまり上品上生の人で、立派な蓮台に乗せられて、大勢の御佛に守られて極楽に生まれさせていただくのです。では、その上の上はどういう人か。これは極めて当たり前で、善人なのです。要するに、悪いことなんか一つもしない、いわゆる聖人です。親孝行は至れ

り尽くせりであって、夫婦の愛情も親子の愛情もいうことはありません。友達との交わりも満点、しかもその上に経典を暗記して読むという人たちです。これでは、だれが聞いても、真っ先に極楽へ行かれるのは当たり前だと思います。これが常識の世界で、上の上はかくのごとく優遇されているのだというのです。それから、上の中から上の下へ、つづいて中の上から、中の中、中の下といつて、ここまでの六段階が善人といわれているのです。

下からが、はつきり悪人になるわけです。下の中にも上中下ありで、悪人のなかにも格づけすると上中下があるというのです。下の下は悪いことばかりしている人です。人をだます、人を殺すなど、悪いことばかりしているから、本来ならば、下の下のものは、どう考えても地獄へ落ちるのが常識の世界で、当たり前と思っっています。ところが佛教は違います。そんな極悪人でも「南無阿彌陀佛」と口に出して称えたら、その声を聞かれた如来は、すぐ金色の蓮台をもつて、佛・菩薩をしたがえてお迎えにまいります。そして、蓮のうてなの浄土へ導いていくのです。

ですから、ある意味においては極めて常識的です。上の上から先に浄土へ導かれていく。下の下は地獄へ行くのだ

が、佛心をもつて特別の計らいで浄土へ連れていく。そのかわり念佛だけを称えなさいというのです。こうなるとお念佛を称えるのが一つの資格になるわけです。親鸞聖人は、本願をそう受けとつていいのかが、大きな疑問になったのであります。

何よりも、いちばん煩悶なざったのは、自分には、上品上生ということは、とてもさたもない、それではと、上の中、上の下と、非常に内省、内観が深かまって、結局、自分こそは下の下なのだと思つたのでありましょう。おそれなくそのときは、親鸞聖人の心境は絶体絶命であつたのではないでしようか。頭をそつて山へ登つて修行をし、二十年もたつたのに、まだ何もわからない。これはたいへんな悲しみであつたのでしよう。そこで山を下りて、聖徳太子のお建てになつた六角堂に入りました。聖徳太子に願われたか、観音さまに願われたかは知りませんが、わが行く道を教えていただきたいという気持ちがあつたのでしよう。それで六角堂におこもりなざつて、祈られるわけです。九十五日目のときに夢をごらんになって、一つのヒントを得られました。やがて堂を出て、法然上人の門にお入りになるのです。

(元協和醱酵工業株式会社々々長・前在家佛教協合理事長)